

「宝島ボランティア活動」を通じて知った日本

※私が今回こういったボランティア活動に参加したのは「日本人の日常」をより深く知るためです。今後の研究テーマを「日本人の世論・意識」にしようと思っっているので、他の日本人の学生とはインターンシップに対する考え方が違うことをご了承ください。

1. 初めに：「宝島ボランティア活動」に参加した理由

私が「宝島（鹿児島県）」という離島でボランティア活動をしようとした理由は単純だ。「島国」の日本で留学生活をしながらも、そういった事実を実感する機会がほとんどなかったためだ。東京が港町という事実も同様に忘れてしまいがちだ。「島国」という特徴を自分で直接感じたかったことが、参加した一番の理由だ。

日本が「列島」と呼ばれるのに、私は本州、北海道、九州しか行ったことがなかった。「これでは韓国での生活と変わらない」と考えたほど、私は「物足りなさ」を感じていた。しかし、ただ単にどこかの島に旅行に行くより意味のある活動をし、現地の人々と触れ合いながら、何か役に立ちたいと思った。

そうした中、インターネット検索で、偶然「ECOFF」という NPO 法人を見つけた。主に日本の離島（宝島、諏訪之瀬島等）や台湾・ベトナムの村の人々と日本の若者をつなぐ活動を事業として行っている団体だった。とりわけ、日本及び海外の「村おこし」という目標を掲げている NPO である。ECOFF については後述するが、NPO の職員は島で活動することなく、現地の人々とボランティア参加者を仲介する役割を担っている。もちろん、出発前の準備や参加者とのやり取りはすべて「ECOFF」を通じて行われる。参加費の一部は ECOFF への寄付金ともなる。韓国ではこういった活動方式に接したことがなかったので新鮮に感じた。

ECOFF のホームページ上 (ecoff.org) で確認できたのはボランティア活動をする場所と日程、そして漠然とした活動の内容程度だった。私は最初、名前に惹かれ「宝島」に場所を決めた後、活動期間を 8 月 24 日からの十日間とした。宝島は鹿児島港からなんと「13 時間」もかかる。23 時に出港するフェリー（フェリーとしま）は次の日の朝 11～12 時に着く。フェリーを紹介しているウェブサイトには「天気により出港や所要時間に大きな差がある」と書かれていた。しかも、宝島で私の携帯電話が繋がらないことも初めて知った。ドコモとソフトバンクはつながっているが、AU はまだ設備がないという説明だった。Wifi の繋がる宿以外では、携帯電話は使えないのだという。「離島での生活」を出発前から実感した瞬間だった。「勇気と覚悟が要る」ともいえるボランティア活動だった。

私は 2010 年 11 月に北朝鮮の砲撃があった「延坪島」^{ヨンピョンド}に新聞記者として取材に行ったことがある。延坪島は仁川^{インチョン}から船で 4 時間程かかる島だが、北朝鮮の甕津半島^{オンジン}まで 30 分～1 時間しかかからない。韓国より、むしろ北朝鮮のほうに近い島である。このため、島の住民は北朝鮮の情勢

に対して常に敏感だった。私は砲撃があつてから3日後、やっと島に入ることができた。しかし、3~4日が経った後、また北朝鮮からの砲撃があつたらどうしようかと不安になり、私は一刻も早く島を出たくなった。また、3日後、ようやく砲撃の可能性が低くなり、取材も終わりを迎えていたが、問題は天気だった。悪天候が続いて、船の島への出入りが不可能になったのだ。私はこういう悪夢(?)を思い浮かべながら、宝島に行く際には天気による影響がないよう願った。

鹿児島に向かう前、周りの日本人に「宝島という島について聞いたことあるか」と聞いてみた。すると、ほとんどが「初耳」という反応だった。小説や漫画の背景になりそうな名前ですら「本当に実在するのか」と疑問を示す人もいた。なぜか「日本人にも知られていない離島に行く」という事実が、私を浮かれさせた。こうして「こじんまりした島での生活を通じて日本をより理解する」という目標を立て、出港地、鹿児島に行くことにした。

2. NPO 法人「ECOFF」の紹介

まず、今回のボランティア活動の窓口となった「ECOFF (東京都文京区本駒込)」という NPO 法人を紹介したい。ECOFF のホームページによると、「ECOFF は都市を知る人と田舎を知る人が集まり、日本の農村漁村を元気づけるためのプロジェクトを実践するために設立された」とある。また、「主として農村漁村でのボランティアの紹介と、ボランティアと農村さんが力を合わせて作った商品の販売事業(えこふ市場)を行っている」と説明している。設立年度は 2010 年だった。とりわけ、都会に住んでいる人々(主に若者)と田舎の住民とを結ぶ事業を行っている。ECOFF 代表、宮坂大智は「ECOFF では主にボランティアツアーを実施することで、誰でも地域に行ける仕組みを作っています」と強調している。単にボランティア活動だけでなく、参加者が現地の美しい自然と触れ合う機会を与えるのが、ECOFF プログラムの特徴の一つであった。これが、ボランティアツアーという名前の由来だ。

最も、ECOFF は「地域活性化を難しく考えすぎず、まずは気軽に旅行に行くような気持ちで参加できるボランティアツアーを作りたい。地域の方にとって、迷惑にならない、本当の意味でお役に立てる企画を作りたい」というように理念を明らかにしている。ボランティア活動の壁・ハードルを低くするということだ。

毎年春と夏、連休(ゴールデンウィーク)などにボランティアプログラムを用意し、参加者が自らの日程に合わせ活動できるようにしている。10 日間のプログラムは、大体 8~9 人が定員で構成されている。今年のボランティア活動の場所は、宝島を初め、諏訪之瀬島(鹿児島県)、琵琶湖(京都府)、佐渡島(新潟県)、沖縄やんばる、ベトナム、台湾だった。私にとっては日本がすでに外国であるため、戸惑いなく宝島を選んだ。

各地域には ECOFF とかかわっている、いわゆる「コーディネーター」がいる。コーディネーターは ECOFF に属していない現地の住民で、ボランティアの活動や宿泊施設の管理、食材の手配(炊事はボランティアの役割)を担っている。ボランティアの活動は大方コーディネーターの主導で行われる。また、コーディネーターは現地の他の住民にボランティアを紹介する役割も与えられている。何より、離島という「小さなコミュニティー」で「見知らぬ部外者」が増えるということに反感を持っている人も少なからずいるそうだ。そういった人を説得するのもコーディネーターの重要な役割という。

ボランティア参加者とは別に島で長期間滞留しているインターンもいる。インターンは一定のお金を受けとりながら、現地で1~2か月間生活する。役目はコーディネーターとさほど変わらないが、部外者目線から参加者をサポートする。主に、大学生のインターンが多いようだ。ただし、今回、私が参加した宝島のボランティアツアーにはインターンがいなかった。

出発する前にはECOFFからの連絡を通じて準備する。現地に到着してからはコーディネーターの引率でボランティア活動が行われる。個人的には、スケジュールは最初から最後まで手厚く、都会人を田舎で日常的に活動できるようにする、効率的な仕組みだと思った。最も私は台風の上陸で日程の急な変更を経験したため、彼らとのやり取りはより大切だった。

3. 宝島の概要

上述したように、宝島は日本人の間にも、読み方すらさ知られていない島である。宝島は漢字をそのまま「たからじま」と読む。宝島が属しているトカラ列島を紹介するホームページ(<http://www.tokara.jp/profile/takara.html>)を見ると、宝島が「トカラ列島の有人島では最南端の島で、隆起したサンゴ礁でできたハート形をした島」ということが分かる。鹿児島港から336km、奄美大島から90km離れた位置にあり、奄美大島のほうが宝島からより近い。フェリー（フェリーとしま）は週に2回だけ島に来航する。このフェリーが急に欠航となると事実上島は孤立の状態に置かれる。

面積は7.14km²で、車に乗ると2~3時間内に一周することができる程小さい。人口は116人で、特徴としては村に警察署が存在しない。徹底した「住民自治」が村の原則となっている。島民によると誰かが犯罪を起こしたとしても逃れるところがないため、心配する必要はないという。

気候は亜熱帯で、海の色は東南アジアのようなエメラルド色だった。主たる産業は牧畜業、農業（畑）で、意外と漁業は盛んではない。ただし、近来、トビウオ架空業に取り組み、新たな産業にしようとする動きは存在する。また、島内には小学校と中学校しかなく、高校生になると全員鹿児島市内の高校に転校する。島民の子供のための寮のような施設が鹿児島市にあるそうだ。

宝島という独特の名前が付いた理由については「17世紀、イギリスの海賊、キャプテンキッドが財宝を隠したという言い伝えがあり、財宝を隠したという鍾乳洞もある」と伝わっている。これは1824年8月のイギリス船の到来と関わっているともいわれる。

次は「ウィキペディア」の名前の由来についての説明だ。「当時、イギリス人たちは島民に牛を譲渡するように要求した。在番及び郡司が拒否したため、20名から30名程度のイギリス人が島に上陸し牛3頭を略奪した。この事件で横目の吉村九助が在番所でイギリス人1名を射殺、流人であった2名の武士も争いに参加したとある。この事件が1つの要因となり、翌年の1825年には異国船打払令が出された。この事件の顛末を吉村昭が短編小説『牛』で描いてもいる」。こういった宝島の歴史を見ると、島の規模は極めて小さいが、日本の近代における意味は小さくはないともいえる。

4. 台風上陸による日程の変更

私の「宝島への道」を一言で表現すると、思ったよりとても遠かった。なぜなら、宝島に出発する予定だった8月24日に台風15号が鹿児島島に接近していたためだ。当然、24日に出港する

予定だったフェリーも欠航を余儀なくされた。問題はいつ出港が再開するか、わからないことだった。そのため、日曜日から再度ホテルを探さなければならなかった。雨の日にホテルを転々としながら、鹿児島市の都心部を歩き回った。予想外にも、鹿児島市内を見物する機会を得た。

フェリーは鹿児島から月曜日と木曜日に出港する。週に2回だけだ。台風の影響で月曜日のフェリーが欠航となったため、次は木曜日だった。しかし、木曜日（8月27日）のフェリーは悪石島せきじまで開かれる「ボゼ祭り」特別便になっており、チケットが買えるかどうかわからなかった。ボゼ祭りは東南アジア・アフリカの部族の風習を連想させる、かなり奇異な祭りである。私は欠航をきっかけにボゼ祭りを初めて知った。毎年旧暦7月16日に催される。ウィキペディアの説明によると祭りでは若者が赤土と墨で塗られた異形の面を被り、ビロウの葉の腰蓑を巻き、手首や足にシュロの皮をあててボゼに扮し、手には男根を模したボゼマラという長い棒を持つ。写真だけ見ると、日本の風習とは到底思えない。今回の欠航によって、思わず得た知識だった。トカラ列島の文化の特異性を示す非常に独特の風習と思われる。

幸い、フェリー会社が臨時便の運航を決定し、水曜日の23時にフェリーに乗ることができた（ボゼ祭りは台風の影響で中止された）。また、台風15号による被害が少なからずで、宝島のボランティア活動が主に復旧作業となるとのニュースもあった。

こういった経験を通じて、離島は自然災害に非常に脆弱であることを改めて感じた。最も、船という交通機関は気候の変化による運航の変更が頻繁にある。離島での生活は単に施設が足りないのみならず、ある程度の孤立を覚悟しななければならない。これはまさに島の多い日本で意識しておかなければいけない点だと思った。

結局、26日23時に出港したフェリーは次の日（27日）朝11時半頃に宝島港に着いた。天気は台風一家で、いつの間にか真夏の猛暑日になっていた。

5. 活動の詳細な内容

今回の参加者は私を除くと、全員20代前半の大学の学部生だった。田舎または島生活に憧れを抱えている人が多く、性別は男女それぞれ4人だった。参加者合わせて8人は鹿児島港で初めて会い、その後フェリーに搭乗した。

宝島では「シェアハウス宝島」という宿に泊まり、建物内にはキッチンと3部屋が付いている。エアコンが設置されていなかったため、亜熱帯の気温をそのまま体験できた。食事は自炊が原則だった。二組みに分け、日によって何を作るか組ごとに決めた。米などの食材は鹿児島から調達された。最初、贅沢だった料理は時間が経つにつれ簡単なものになっていった。朝の活動は大体8~9時に始まったので、朝食は5~6時に準備しなければならなかった。朝食は主にパンかご飯に味噌汁程度を食べていた。ただし、晩御飯は宝島の住民たちから刺身（魚）や肉などをもらい、かなり贅沢な料理を食べることができた。寿司屋でのアルバイト経験を持っていた参加者がいて、魚を上手にさばいてくれた。新鮮な魚を食べた時には島にいることを実感した。

さて、宝島でのボランティア活動の内容を説明すると、やはり力仕事メインだった。頭脳を使って何か工夫をするより、宝島のコーディネーター、竹内功さんの指示による力仕事が多かった。上述したように、台風による被害が発生したため、最初はそれと関わっている作業が多かった。

功さんは埼玉出身で学校は東京だったそうだ。奥さんの寿恵さんは元デザイナーだった。竹内さん夫婦は 10 年余りに宝島へ移住し、現在は二人の子供とともに暮らしている。功さんは宝島の産業や生活の改善のため多様な取り組みを考えている。たとえば、バナナやドラゴンフルーツをカレーやジャムなどに商品化するなど、島の農産物の商品化に取り組んでいる。寿江さんは保育園で働きながら、宝島の子育てや教育にかかわっている。キャリアを活かし、桑の皮を活用した手工芸商品を開発している。ただし、竹内さんの本業は島らっきょう栽培だった。もう ECOFF の宝島プログラムが 2 年たったためか、竹内さん夫婦の参加者への案内や引率は非常に手慣れたもので、印象深かった。

また、今回参加者の世話役となっていたのは衣笠葉子さんだった。葉子さんも都会（千葉）出身で、2 年前に ECOFF のプログラムに参加した後、移住を決意したそうだ。宝島の魅力に惹かれ、農産業や島生活のあらゆる面を学んでいる最中だった。葉子さんがいたので、宝島ではインターンを募集しなかったそうだ。葉子さんは初日から最終日まで、参加者たちと島の住民をつなぐ役割を果たしていた。

八日間にわたって行われた作業は①台風の被害を受けた建物の撤去②島の施設の防水のためのコンクリート作り③和紙の原材料になる楮こうぞの枝の伐採④桑の皮の剥ぎ取り（繊維）⑤農作業の手伝いなどだった。この作業の間には宝島の隅々を訪れ、島生活の様々な面を学んだ。時々、晩御飯を兼ねて宝島の住民たちと触れ合う機会が与えられた。繰り返される生活が退屈にならるように、宝島という小さな島の人々は毎日自身の体で何か（作業）をしながら、時間を送っていた。

天気によりその日の作業は大きく変わってしまい、まさに「行き当たりばったり」であった。これも島での生活なら欠かせない事だと思った。朝 8～9 時に宿から出て、12 時から 1～2 時間昼ご飯を食べる。それから 18 時頃まで作業をした後に、夜は住民との交流会に参加する。大体こういった日程の繰り返しだった。詳細な日程や作業は次のとおりである。時間によって、初日から最終日までまとめて書く。主に当時書いた日記を中心として、報告書に合わせ書き直した。すべての日程を表でまとめると以下のとおりである。

日時	午前	午後	その他
8 月 27 日（木）	上陸	宝島巡り	住民の人々とあいさつ
28 日（金）	撤去作業	桑の幹からの繊維取り	
29 日（土）	桑の幹からの繊維取り	港湾施設の掃除	鍾乳洞探検、トビウオ工場見学
30 日（日）	コンクリート作り	牧場や灯台の見学	防波堤での釣り、漁港での魚の鱗取り、町のパーティーでの住民との交流
31 日（月）	畑の片付け	楮伐採	海遊び、
9 月 1 日（火）	コンクリート作り	島見学、お土産購入	バーベキューパーティー
2 日（水）	出発	鹿児島ツアー	

		—	
--	--	---	--

(1) 8月27日(木曜日):「いよいよ、宝島への上陸」

台風15号の影響で月曜日に出航予定だったのが水曜日に延期になってしまったが、8月27日12時頃、フェリーとしまは無事宝島港に到着した。天気はものすごく晴れており、蒸し暑い日だった。鹿児島から336kmも離れていることを体で感じた。海の色がエメラルドだったこともまた宝島の位置を語っていた。台風の跡は見つからないほどだった。宝島の初印象は言葉で表せないほど綺麗で、自然そのものという感じだった。

寿江さんが笑顔で私たち8人を迎えてくれた。寿江さんは私が「ECOFFを通じて宝島を訪れた2回目の韓国の人だ」と教えてくれた。今年のゴールデンウィークに韓国男性が日本人の奥さんと宝島でボランティア活動をしていたそうだ。

フェリーに参加者とともに乗せられていた食材を運ぶことから活動は始まった。参加者は軽トラックの後ろに乗りながら宿に向かった。この時に見た風景は最高だった。

出発する前に、功さんから注意事項を教わった。地元の人々と触れ合う際の大事なルールだった。まず、「島の人々との挨拶」が最優先に強調された。「小さなコミュニティであるため、見知らぬ人への警戒感を考えてほしい」という理由だった。また、一人でどこかに移動するときには必ず周りの人に話すように、とも言われた。島という狭い空間で細かいルールを守ることの大切さを改めて実感した。

最初の活動は宝島の海への見学だった。まず、名前が付いていないこじんまりした海水浴場を皆で見に行った。この日は「引き潮」と言われ、水量が十分でない可能性が大きかった。しかし、目にした海は意外と水の量が豊富で透け通るほどだった。南国の水で皆驚いた。宝島が有名な観光地でないため、自然が比較的そのまま保存されているようだ。また、島の牧場の馬や畑などを見学した。

夕方には宝島のコミュニティセンターにある温泉にも入った。ただし、お湯は天然温泉でなく、島の地下水を沸かしたものだ。温泉はフェリーが宝島に着く日のみ、開くという。長い船旅に疲れた人のための施設のようにみえた。参加者たちもこの温泉に入り、何日間かの疲れを取った。温泉の後には散歩を兼ねて宝島に一つしかない売店に行き、お菓子や飲み物などを買った。売店も開いている時間は限られていた。朝、昼、夕方のそれぞれ1~2時間ずつ開いていた。

夜になって見上げた宝島の空は満天の星空だった。工場も明かりもない宝島の夜空は都会では決して見られない宝物だった。

(2) 8月28日(金曜日):「作業の始まりと日本人の若者たちとの触れ合い」

この日から本格的な作業が始まった。毎日の作業の流れを説明すると、前日に功さんか葉子さんが、翌日の集合時間を告げる。この時点にも何をするかは決まっていなかった。翌朝の集合時間に合わせ、参加者皆は待ち構えている。功さんに呼び出され宿を出ると、その日の午前中の作業を知る。こういった流れの繰り返しだった。最も重要なのはその日の天気だった。天気が悪くなると大体外での作業が混乱になるためだ。しかも、宝島の天気は亜熱帯らしく、非常に不安定であ

った。朝にいくら晴れていてもいつの間にか雨が降ってくる日も少なくなかった。これも島生活の一部と受け止めざるを得なかった。出発する前に見た「決まったスケジュールはありません」という言葉も理解できた。

初のボランティア活動は朝早くからだった。私はほかの男子たちと一緒に台風で崩れてしまった家屋の撤去及び後片付けをした。家屋とはいえ、木材で建てられたトイレ用の建物だった。それが、直前の強い風により崩れ、事実上もう誰も入れなくなったのだ。風がいかに強かったかを屋根が消し飛んだことからわかった。天気は午前中不安定だった。小雨が降ったり、炎天下になったりし、作業の間に少なからぬ休憩を取らなければならなかった。その気温差も激しく、風にひきやすいと思った。

撤去作業は多様な道具を使いながら行われた。ノコギリや鋏で木材を建物から分離し、軽トラックに運ぶ、という割と地道な作業だった。最初はかなり大変だったのが、作業の要領がわかってからは、やや楽に感じた。ただし、床に生えていた根っこを引き抜くことには相当の力が必要だった。取っても、取ってもなかなか抜けなかった。結局、チェーンソーを使ってから切ることができた。私は7年前に兵役を済ませてから、全く力仕事にかかわることがなかった。そのため最初はかなり苦勞していた。だが、少しずつ要領を覚えて作業を進めることができた。作業の末、皆汗びっしょりになった。建物は形態がなくなり跡だけ残った。「少しでも台風の被害の復旧作業の役になった」というやりがいも感じた。やはり肉体労働こそ、真にやりがいのある人間の活動ということを改めて実感した。この日から毎日のように肉体労働の続きだったのだが、一日もやりがいのない日はなかったと思う。

男子チームが撤去作業をしているうち、女子チームは室内で桑の幹から繊維を取る作業を行っていた。皮をはぎ取るかなり地道な作業だった。午後は男子チームも女子チームに交じり一緒に作業を始めた。はぎ取れた皮はまた手工業を通して繊維となる。これはまた和紙や飾り物に生まれ変わる。功さんたちはこの繊維で作った物を宝島のお土産としての商品化に取り組んでいるそうだ。皆、こういった繊維で作られたお土産をもらった。作業中は皆夢中になって、黙々と皮取りを繰り返しているだけだった。

夜は作業のおかげか、大分今回のグループの面々と仲良くなってきたと感じた。仲間意識ともいえるだろう。一日の経験の話に花を咲かせた。今回の参加者は大体おとなしい人が多かった。面白いのは男子の方が少しうるさかったのに比べ、女子たちは静かだったことだ。

外国人の私は、日本の若者たちと触れ合いながら、彼・彼女たちの考え方や態度なども知った。学校で会った院生の日本人とも違った。皆、19~21歳で活況あふれていた。大学院でなかなか聞くことのない若者の俗語や流行語なども習った。韓国の大学生の遊び方、言い方ともさほど変わらないと思った。

ところで、参加者たちと話して最も驚いたのは島や田舎など「村生活」に憧れを抱いている人が結構いたことだ。都会とは異なる「スローライフ」ができることが素敵だ、という理由だった。もちろん、宝島でのボランティア活動をしながら、村生活が単なるスローライフだけではないことも皆実感してきたと思われる。スローライフの裏には、地道な肉体労働が置いてある。また、決まっていない労働時間や天気による作業も現実の一面である。

(3) 8月29日(土曜日): 島生活の全てを左右する天気の威力

この日は朝から午後まで雨だった。天気が作業の内容を左右する島の生活の性格上、午前は皆前日に引き続き桑の幹から繊維を取る作業を行った(当時、宝島では室内でできる作業はこれしかなかった理由もある)。手慣れた作業だったため、前日よりスピードがより速くなり、積もっていた桑の幹もどんどんなくなってきた。円形で座っていたので、たまに葉子さんと功さんから宝島の特徴や歴史などを説明してもらった。島の人々が名字ではなく、あだ名か下の名前で呼ばれていることも教えてもらった。これは同じ苗字がおおいためだった。また、「今年は例年より雨の日が長い」という話もあった。気温が低くなるため、バナナ栽培にも悪い影響があるそうだ。実際にバナナ畑を通り過ぎた時に見たバナナはまだ実っていないままの緑の色だった。気候変動が宝島ではより現実感を帯びていた。

午前の作業が予想より早く終わり、宝島の名所と知られている鍾乳洞に連れて行ってもらった。上述したように、宝島には結構深い鍾乳洞がある。ここにイギリスの海賊が宝物を隠していたという伝説も存在する。鍾乳洞の入り口は島に散在している。大雨が降った後には中に川もできるそうだ。実際に入っていった鍾乳洞は険しくて、何よりも暗かった。中に深く入ると、何も見えないほど真っ暗だった。まさに盲人になった気分だった。一人では非常に危なく感じるような洞窟だった。皆、手にした懐中電灯を洞窟の隅々照らしながら、前に進んでいった。洞窟を探検する気分だった。また、実際に何も見えないところに水が流れていた。これは宝島の源流で、自然のありがたみも感じた。

午後からの作業は港湾の休憩施設(待合室)の掃除だった。この施設も台風の影響で窓ガラスが割れてしまい、中には泥水やごみ、がれきなどが流れ込んでいた。参加者と功さんの9人がごみを分別しながら綺麗に掃除した。しかし、掃除しているうち、再び強い雨が降ってきて中が多少汚れてしまった。また、掃除するしかなかった。

夕方にはトビウオを冷凍保存する工場のような施設を見学した。宝島の周辺で取られる魚は大抵商品としての価値が高くはないそうだ。トビウオもその一つで、私も、他の参加者たちもこれまでトビウオを食べ物として思ったことはほとんどなかった。現在、宝島は産業基盤が弱い。農業や牧畜、一部の観光業などが行われているが、十分ではないという。このため、トビウオ加工にも取り組んでいるそうだ。ここで冷凍トビウオ2匹をもらい、晩御飯の食材にしようとした。意外と美味しかったので皆驚いた。トビウオをどうやって商品化して、アピールするかが今後の課題になるだろう。

(4) 8月30日(日曜日): 島の自然を満喫する

宝島での活動(もしくは生活)に休日にはなかった。これはカレンダーと関係なく自然の流れに合わせ生活する島の住民には当然なことかもしれない。この日も朝から空はどんよりしていた。

この日にはコンクリート作りが男子チームを待っていた。降り続けていた雨による土砂崩れを防止するため、宝島の施設の補強工事をする必要があったのだ。コンクリート作りも単純な力仕事だったのだが、撤去作業並みの体力が要った。セメントと砂、砂利を1:4:4の割合で混ぜてコンクリートを作る。砂は直接宝島の砂場まで行き、運んできた。シャベルを使って何回も砂を軽トラックに乗せた。繰り返し腰を下げていたため、最後には腰を少し痛めた。男子チームがコ

ンクリートを作っているうち、女子チームは桑の木の枝を採集していた。皆雨が降っていたにも関わらず、何気なく力作業に慣れたように感じた。男子チームは一日分のコンクリートを早めに作り、しばらく宝島の防波堤付近で釣りもした。海は魚が泳いでいるのが見えるほど透明だったが、なかなか魚は取れなかった。結局、釣りには皆失敗してしまった。

午後にはようやく雨が止んだ。宝島の遠くまで軽トラックの後ろに乗りながら見学する機会が与えられた。宝島には船の通行を案内する灯台が小さい山の頂上にある。灯台までの道は広大な牧場の中に伸びていた。草原ともいえるほどだったので、現在（11月）になっても緑の草場と黒牛の平和な風景が鮮明に脳裏に残っている。灯台からはトカラ列島の他の島々まで見渡すことができた。まさに絶景と呼べるほどの光景だった。参加者たちは岩の上に登って記念撮影した。雄大な宝島の自然を満喫した瞬間であった。疲れも取れた気分を覚えた。

帰りには小さな漁港に寄った。島の人が漁から帰ってきていた。ちょうどこの日に宝島の中学校で島挙げてのパーティーがあったため、彼は何匹もの魚を取ってきた。パーティーで食べる刺身用だった。

我々は一人ずつ停泊中の漁船に乗り、鱗取りに挑戦した。しかし、そう簡単ではなかった。そうしてからは、さばいた魚、とりわけ刺身がこの場で参加者に与えられた。頂いた魚は晩御飯のためのあら汁や刺身、煮付けになり、皆美味しく食べた。

また、この日にはコミュニティーセンターまで呼ばれ、宝島の住民の人々と飲みながらカラオケで歌を歌った。おそらく、毎日のように会っている仲間かもしれないが、皆楽しく遊んでいた。たとえ小さい島であれ、「退屈に暮らさないように皆頑張っているんだな」と私は思った。

(5) 8月31日（月曜日）：大変だった伐採作業

この日には朝7時に宿を出た。参加者たちが向かったのは畑だった。事実上畑は放置されていた。畑の地主さんは60代のおじいさんで、「体力が足りないので、台風で農作物が倒れていても立てられなかった」と事情を説明した。それで始めたのが雑草取りと後片付けだった。畑を綺麗に片付け、今後新しい作物を植えるようにすることが大事だった。畑での作業は人手が足りない島の現実をも知らせた。ボランティアの人数が多かったおかげか、作業は予想だった4時間より遥かに早い2時間で終わってしまった。

朝から不安定だった天気は終わる頃雨を降らし始めた。雨にも関わらず、作業が早く済んだため、1日目とは違う場所の海に行くことになった。海岸はほとんど石で、一部に湾のような形をしているところがあった。水深はやや深く、適切な水泳用具がなければ入りづらく見えた。天気がより悪くなったため、波が荒れていた。結局、1日目の海に戻り、水遊びをした。幸い、空は晴れていた。私は水遊びには興味がなかったので、海岸の岩に芽生えている食用植物を取った。味噌汁に入れたり、お肉と一緒に食べたりするそうだ。

午後は楮の伐採が男子チームを待っていた。伐採は宝島一周道路を走りながら、見当たる楮をノコギリで引く相当大変な作業だった。切れるような楮の枝は大体高くあったため、我々を苦勞させた。最初はやはり苦戦の続きだったが、慣れてからは太い楮の木を切るようになった。まさに木こりになった気分を感じた。天気は午後からより蒸し暑くなり、皆汗ばんだ服で作業を続けた。悪戦苦闘だった。宝島の作業でも難易度が最も高かったと思う。ただし、一周道路から眺め

る太平洋の光景は壮大だった。作業の疲れも忘れるほど美しかった。

夜はまた宝島の人からキハダマグロを頂いた。島で栽培したドラゴンフルーツも一緒だった。参加者のうち、寿司屋でアルバイトしていた人が魚をさばいて刺身を作った。意外と毎日の晩御飯は贅沢で、料理で皆癒されるようだった。毎晩、功さんと葉子さんが鹿児島焼酎を調達してくれ、東京ではなかなか体験できないおしゃれな刺身を肴に皆で楽しむことができた。私にとっても、日本の若者の率直な思いなどをわかる大切な時間だった。

(6) 9月1日(火曜日)：バーベキューパーティーで宝島での生活を幕を下ろす

いつの間にか9月となった。事実上宝島での生活を仕上げる日だった。

午前はコンクリート作りの続きだった。既にしたことがある作業だったため、スムーズにできた。実際に作ったコンクリートを宝島の道路や建物のひびなどに塗る工事も行った。上述したように、宝島は建設会社も行政も存在していないため、あらゆる分野が住民の自治に委ねられている(実質的な行政事務は主に鹿児島の役場で行われているという)。行政からの干渉が少ない一方で、細かいところまで気を使わなければいけない。これは良いとも悪いとも言えないところだろう。ただし、功さんは現在 ECOFF ボランティア参加者の宝島への受け入れを通じて、「住民自治と部外者との協力」を宝島の将来のためのモデルとして考えているようだった。最もボランティア参加者は単に観光目的で島に来るわけでもないため、宝島としても大切な存在となっていると私は感じた。人々の連帯感・信頼感の程度が高い日本では、十分に考え得るモデルだと思った。実際11月23日に ECOFF のホームページを確認したところ、募集中の来年2月のプログラムも続々と参加人数が定員に達している。

午後は宝島見学とお土産の購入の時間が与えられた。宝島で生産されたカレーやジャムなどが割引価格で購入でき、私もカレーもドラゴンフルーツなどを買った。ジャムが入っている瓶は宝島の特徴が良く再現してあった。

夕方からはビーチでのバーベキューパーティーが開かれた。慣例として、出発する前日にはバーベキューパーティーをするそうだ。今までは大体悪天候の続きだったが、幸いこの日の黄昏は素晴らしかった。満天の星空も見ることができた。お肉、野菜、全て美味しく、素潜りで取った伊勢海老や夜光貝も食べることもできた。宝島の人々はもう ECOFF の参加者たちをただの部外者でなく、島に好意的に助けになるため来ていると認識しているという。退屈そうな島の生活に、参加者たちが邪魔者でなく、活力を与える存在となっているということだ。

一時的な活動にとどまるとしても、都会の人々が宝島という島に出会い、将来人生がどう変わるかはわからないと思った。寿江さんは「宝島を第二の故郷として記憶してほしい」と言った。皆がそうなるとは限らないが、少なからぬ人はそういった思い出を抱えて家に帰るのではないかと考えた。

(7) 9月2日(水曜日、最終日)：出発した鹿児島で最後の晩餐会

この日で活動はすべて終了した。台風の影響で日程が急に変更したことは残念だったのだが、その分参加者の皆、より頑張ってきたと思う。むしろ、「台風の被害を復旧する」という実質的な作業に参加でき、やりがいがあったとも考えられる。私にとっては電話もつながらないところま

で来て、30代の自分を振り返ってみる大切な時間になったと思った。

20時頃に再び鹿児島港に着いた。最後の晚餐は鹿児島中駅にある鹿児島産料理のバイキングのお店だった。晚餐の後、一人一人とも握手しながら別れた。後日、また機会があれば皆で会うことにした。

感想を言うと、正直、合宿で日本人と日常時間のすべてを送ることは大変だった。言葉の問題も時々あった。文化の違いはさほど感じていなかったのだが、むしろまだ社会人の経験のない若者との年齢の差(?)を実感した瞬間もあった。もちろん、そうしたことにも関わらず、個人的には宝島でのボランティア活動を通じて学んだことがますます多かった。全体的な感想などは次の項目にまとめる。

6. 活動を通じて得たもの

最初に立てていた目標、とりわけ「宝島でのボランティア活動を通じて日本を理解する」というところはできたか。ボランティア活動が終わってから3か月余り経っている現在(11月25日)、私は何を得たのか。

まず、体力的に相当苦労したことは確かだった。帰ってきてから何日間、毎日21~22時になるとすぐ眠くなった。実に久々に肉体労働を続けていたせいか、無気力で何もできない日も長かった。後遺症ともいえるほどだった。しかし、東京の空を見つつも、たまには宝島の星空が思い出される。爽快な空気と港で眺めていた日の出も恋しくなる。正直冬学期が始まるまで私の精神は宝島に縛られていたのかもしれない。

宝島での体験の感想を結論から言うと、ボランティア活動や地域住民との触れ合いは私の日本への理解を深める最も大切な契機となっている。

宝島が本土から事実上孤立していても、島の運営は徹底して自治と自己責任という原理を中心に行われる。いわゆる「信頼」が住民の生活の根底にあり、それぞれの役割が分かれている。ちゃんとした行政組織がなくとも、警察官がひとりもいなくとも、100人余りの人々は生業をしながらも、宝島に自分なりの寄与をしていた。

外国人の私にはこういった仕組みこそ、都会の町内会やPTAの原型ではないかと思わせた。法的強制力の有無に関係なく、コミュニティと個人が自然に結びついていることが印象的だった。もちろん、日本の都会が「匿名社会」となっていることも現実である。隣の住民と交流せず町内で何が起きているかに全く興味を持たない人も増えているようだ。しかし、日本は東アジアで最も「共同体性」が強い国と言われている。むしろこういった組織が個人に負担になっているという記事を読んだことがある。コミュニティ内の自治を重視することは日本の特性ともいえよう。

私の住んでいた韓国の都会には共同体性がほぼ崩壊している実情だ。韓国は、頻繁な引っ越しや交流を阻害するマンション中心の暮らし、コミュニティ組織の欠如などにより、地元への興味が非常に薄れてきている。住民自治という観念も弱い。「地元のみんなで何かをやる」という認識も薄い。日本では現在住んでいる小平だけ見ても、小さな祭りなどが頻繁に開かれる。子供の頃からこういった活動に参加し、地元への愛着を育てるのも日本では一般的だと考えられる。

アメリカの政治学者、フランシス・フクヤマは『トラスト(Trust)』で、日本を「高信頼社会」の例として挙げている。信頼が単に家族の中にとどまらず、地域社会や国レベルまで広がるとい

うことだ。従って、コミュニティ内の信頼も強く、それが人々の中の「取引費用」を減少させるという分析である。宝島はまさにそういったコミュニティの典型的な例だった。

その反面、上述したように韓国は中国とともに「低信頼社会」に属している。なぜなら、韓国人と中国人の信頼の範囲がなかなか家族を超えないためである。公私を問わず、他人を信用できないという人が多い。

ここでの信頼は、いわゆる「ソーシャル・キャピタル (Social Capital)」で、信頼度の高い社会は人々の中の取引費用を下げ、社会全体の効率を高める。「信頼がとりわけ資本になる」ということだ。例えば、契約の時に両方の信頼が高ければ契約金の必要性も少なくなるわけだ。

宝島の人々は地元の信頼を基にし、部外者のボランティア参加者を受け入れている。短期的にはどのような効果があるか確かではないが、長期的には宝島と日本全体を結ぶ重要な役割を果たすのではないか。仲介役の竹内さん夫婦の努力や目標もここに焦点が当てられていると、私は感じた。